



国よ！身内の精算は 早坂吉彦

今年十月十二日付「朝日新聞」の「声」欄に千葉県の男性が投書したものを読みました。概要は「大戦で父を失い、戦争なんて大嫌いだけれど、他国を攻める軍隊ではなく、外敵から自分の国を守る軍隊は必要だ。そういう意識は日本国民なら当然持つべきだ」というものです。改憲に賛成する意見の中で代表的なものの一つだと思えます。また、この考え方に関連して、「国（家）あつてこそその国民なのだから、国の方針に反対するものは出て行けばいい」という言い方も最近あちこちで聞かれるようになりまし。若い人達にも容易に受け入れられる考え方のようです。

満州国 (1932年3月1日、清朝最後の皇帝宣統帝溥儀ふぎを執政として建国。首都は新京(長春)。1945年8月ソ連軍に占領され、日本の敗戦とともに消滅した)



昭和二十年、満州国でそれは、もう夢の中といったもいような六十年程前の情景です。昭和二十年の夏か、初秋です。当時満州国とい、八月十五日を境に消滅したその国の首都、新京市のメインストリート(?)に三歳の私がただ一人立っており、目の前には木箱が何かを足にして戸板を置き、その上には山のように何か小粒の果実が積み上げられておりました。その通りには、終戦の日を境にどこからともなく練り出してきた満州人(中国人)達がお祭り騒ぎのように連日溢れていたといえます。

迷子になり 露天商の家に三晩も泊まる

私は外出した母親のあとを追って行って迷子になり、その雑踏のまただ中にいたわけです。あとになって親から聞かされたところによると、現地の露天商のおじさん(中国人)が、前に立ってもの欲しそうに眺めている私に気づき、売り物の果実を二つ三つ私の手に握らせ、自分の傍に並んで坐らせてくれたのだとか。だれか迎えに来るだろうと待ったけれど、夕方になってしまいました、しかたなく自分の家に連れ帰って、翌日も同じ場所を店を開いたけれどやはり母がいない。その人は独り身だったらしく、私をこのまま引き取って養子にでもと思いはじめた矢先、親達がうわさを聞いて迎えに来た次第だったのだそうです。私が泊めてもらったのは三晩ほどだったようですが、その家(というより小屋だったような気がします)でおじさんに抱かれて寝ながら聞いた(気がするのですが)路面電車の音が今でも耳に残っており、それなのにその人の顔はすっかり忘れていて思い出せないのは不思議な感じがします。人は妙なことを覚えていて、肝心なことは忘れるものなのです。

ともあれ、私がいなくなつてから、親達は家の近くにある電柱などあちこちに張り紙をしてまわり、必死に私の手がかりを求めて走り回ったそうです。が、あの混乱の中でよく見つかったものだというのが正直な感想だったようです。その露天商のおじさんの家の前で、迎えに来た父親に手渡された私が高々と差し上げられた時に見た情景(大ぜいの人がいって私を見て歓声をあげている)を覚えていてというのはいかにも夢だったのかもしれない。(裏ページに続く)

(表ページより)

なぜこんなことを書いたのかと
いいいますと、当時の混乱した状況
の下で、私のように幸運にも無事
に両親のもとに連れ戻された「迷
子」は決して多くはなかったから
です。

終戦の一週間前に

ソ連軍が侵攻してきて

ご存じの通り、ソ連軍の満州侵
攻は終戦のわずか一週間ほど前の
ことです。国境付近の守備隊の中
には、戦車とともに進軍してくる
ソ連軍に激しく抵抗して戦死する
ものも多数あったと記録されてい
ますが、日本陸軍最強といわれた
関東軍もその頃には主力部隊は南
方に移動し、後に「張り子の虎」
とまで酷評されたように、広大な
地に散らばる開拓民や居留民を守
り、安全に避難させる力は全くな
かったのです。

将官たちはいち早く退却

それどころか、ソ連侵攻四日目の
八月十二日には関東軍總司令官
は敵軍が迫りくる首都新京を捨て
て朝鮮国境に近い通化という町に
転進（つまり退却です）してしま
いました。總司令官をはじめとし
て、多くの将官達が小型飛行機や
特別列車で戦線からはるか遠くの
通化に向かっていち早く、混乱す
る新京を離れて行ったそうです。

関東軍の防衛線は一気に朝鮮国境
付近にまで後退したわけですから。

今や、丸裸か同然の人々がソ連
の進軍の下で逃げまどい、新京や
大連といった大都市までたどりつ
けば日本政府の保護を受けられる
だろうというあてもない願いのも
とで、広大な原野を歩き続けるし
かなかつたのです。親を捨て、子
どもを殺し、あるいは現地中国人
に売り、自分自身もやがてはソ連
軍の掃討作戦や現地住民の報復に
よって死んで行った話はこの時各
地で起こっていたわけですから。

国民がどうしてもそばにいて守
つてほしいぎりぎりのその時、軍
隊は、また国家はどこにいたので
しょう。何をしていたのでしょうか。

「私たちは祖国に

一度捨てられました」

その混乱の中でかろうじて生き
残り、あるいは中国人に売られた
りした、いわゆる中国残留孤児達
が昭和五十六年三月を第一次とし
て以後毎年のように肉親捜しのた
めに来日して見ますが、近年はほ
んど成果が見られなくなってい
ます。何の手がかりも得られず、
空しく中国に帰らねばならなかつ
た孤児の一人が泣きながら言った
「私達は祖国に二度捨てられました
た」という言葉を、私はどうして
も忘れることはできません。

軍隊は自国の国民を 殺すことさえもある

少なくとも私には、前述の千葉
県の男性のように「外敵が攻めてき
たら、国民を守り、その家族を守る
のは軍隊である」ということを容易
に信じることはできません。むしろ
軍隊というものは、いざという時に
自国の国民さえ殺すことがあるのだ
と、前の大戦の時に私たちは経験し
たのではなかったでしょうか。
六十年前、日本国憲法が発布され
た時、今までと異なり国民自身がこ
の国の主権者となりました。それは
「国家あつての国民」ではなく、「国
民あつての国家」となったことを意
味しています。これはほんとうに大
事なことだと思います。

なぜかといいますが、この時はじ
めて日本の国民が日本の国に対して
「軍隊を持つてはいけない。どんな
場合にも戦争してはいけない」と命
令できたのですから。国はこの命令
にそむいてはならないはずで
私にとつて、憲法九条とはほんと
うならば私と同じように無事に帰国
して、戦後の平穏な生活をともに
きたはずの子ども達が、今も異国の
暗い土の下で「永遠の
仮寝」をしていること
への、国としての反省
と謝罪の原点であるべ
きだと思つています。



- 筆者の早坂吉彦さんは、「はらまち九条の会」の事務局員です。「私の戦争体験」の第1回にあたり、中国の満州での重い体験を綴っていただきました。
- 紙面の関係でここでは述べられておられませんが、早坂さんたち家族は終戦の大混乱の中、日本に引き上げますが、そのご苦労も大変だったそうです。
- こうした身近な市民の戦争体験を、今こそ次の世代に語り継ぐ必要があります。『九条ブログはらまち』にこのように順次掲載したいと計画していますので、会員の方々や一般市民の原稿を事務局までお寄せください。聞き取りでも結構ですが、原稿にいたします。